滋賀文化財だより
NO. 93
1984. 12. 1
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

128. 近江八幡市堀ノ内遺跡の五角形住居跡について

図1 調査地点

1. はじめに（図1）

堀ノ内遺跡は、近江八幡市の南部馬渕町から千僧供町一帯に広がる千僧供遺跡群の東南部に位置する、弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。遺跡は東方の岩倉山からのびる微高地上に立地し、西方には白鳥川、さらには日野川が北西流している。標高は、概ね 100m前後を測る。周辺は、古くより蒲生郡において重要な位置を占めてきた地域であり、供養塚古墳①を中心とした千僧供古墳群をはじめとして、勧学院遺跡、観音堂遺跡② 御館前遺跡、榎木立遺跡などが集中し、千僧供遺跡群を形成している。

近年この地域では、県営ほ場整備、河川改良工事などに伴う発掘調査が継続して行われており、弥生時代から中世にいたる多くの遺構が確認されている。ここで報告する住居跡も昭和58年度の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査で検出されたものである③。調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてを中心とした竪穴式住居跡群、方形周溝墓、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、溝状遺構などを確認している。五角形住居跡は、堀ノ内遺跡のさらに東南部、岩塚古墳とトギス塚古墳（ともに横穴式石室墳）の中間あたりで、他の竪穴式住居跡数棟とともに検出された。

2. 住居跡の特徴

住居跡は東辺が他の住居跡と重複しているが、その全容を知ることができる(図2・3)。平面形は一辺各各5m前後を測り、南北幅約8m、東西幅約 7.5mのやや隅丸傾向をもつ、ほぼ正五角形を呈している。床面積はほぼ39m²である。遺構面から床面までの深さは、残りの良い西側で約30cmを測るが、東側では壁溝を残すのみであった。

次に竪穴内の構造であるが、まず、各辺に沿って幅20～80cm、深さ10～30cm、断面U字形の壁溝が巡っている。壁溝は北東隅で一部切れており、また南辺で著しく幅を広げ、南隅から東方向に竪穴外へと続いている。

住居跡のほぼ中央には、長径1m、短径60cm、深さ20cmの楕円形の土壙が穿たれており、埋土に炭化物・焼土を含むことより、炉と考えられる。さらに東南隅よりやや北に寄ったところに貯蔵穴と見られる、長径1.3m、短径1m、深さ35cmを測る二段掘りの土壙がある。

主柱穴は、平面形同様に五本・五角形であったと思われ、東南隅にあたるものを欠くが、その他は各隅に対応する位置に穿たれている。柱穴径25～35cm、柱間距離は、西辺が約4mと長く、その他は約2.8～3.1mである。

床面は、全体にわたって堅く踏みしめられており、出入口等の痕跡を特定することはできなかった。中央土壙以外には焼土面はなく、また屋内高床部や間仕切り溝など、特殊な構造も見られない。

3. 出土遺物

住居跡内からの出土遺物は、ほとんどが埋土中に含まれるものであり、床面上のものは極めて少ない。時期は概ね、弥生時代後期から古式土師器までを含む。ここでは、壁溝と東南辺の貯蔵穴と思われる土壙から出土した土器を一部とりあげることにする。（図3、

4）

①は、西辺の壁溝から正位置で出土したもので、最大径12.7cm、底径 3.7cm、現存高 7.7cmを測る鉢形土器である。本来、「受け口」状の口縁部を有していたと思われるが、口縁部欠失後も実用に供されたと思われ、端部は磨耗している。肩部に、描き継ぎを認める7条の櫛描直線文、その下に乱れた波状文を施す。体部外面には細かいハケ目を残し、内面は上半部を横ナデ調整、下半にはヘラ状工具の掻き跡が残る。中央が凹む平底である。

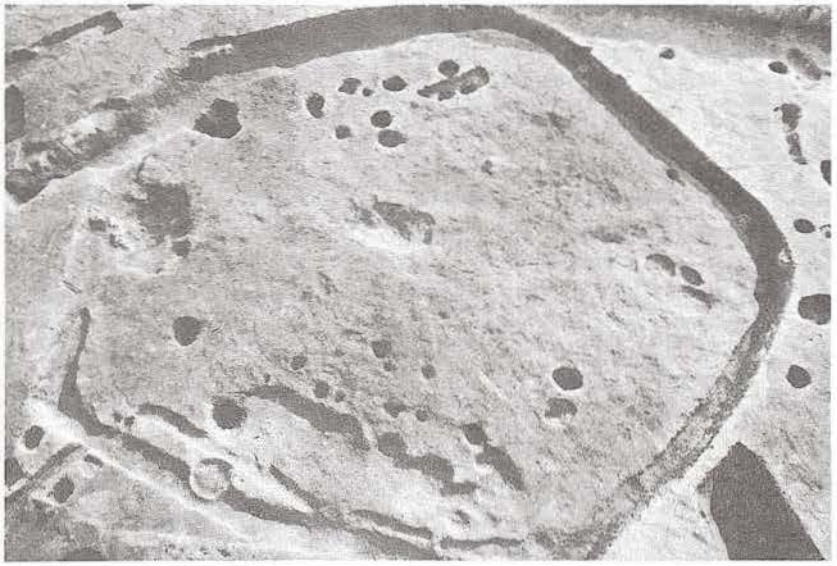

図2　住居跡全景（北から）

②は、壁溝の北西角から出土したもので、これも口縁部を欠く鉢形土器である。偏球形の体部をもち、上げ底状の平底である。最大径16.4cm、底径 4.0cm、現存高 9.7cmを測る。肩部以下、5～6条の櫛描直線文、列点文、波状文を施す。体部中央付近に、幅 0.6cm、高さ 0.3cm、断面台形の突帯を付し、さらに列点文を施す。体部外面を縦方向、底部付近は横方向のハケ調整を行い、内面は上部をナデ、底部付近はハケで調整する。なお、手焙形土器の鉢部になる可能性を指摘しておきたい。

③・④・⑤は東南辺の土壙からの出土である。

③は甕形土器の口縁部であり、口径12.8cmを測る。頸部から「く」の字状に開き、口縁部はやや内わん傾向を示す。端部は内側にやや突出し外面を肥厚させる。上端部は面を有する。肩部に5条以上の櫛描直線文を施し、口縁部は内外面とも横ナデ、体部は、ハケ調整を行う。通有の「受け口」状口縁甕形土器とはやや趣きを異にするようである。

④は、口縁部を欠く鉢形土器である。最大径12.1cm、底部 3.5cm、現存高 7.7cmを測る。肩部付近に最大径をもち、底部は中央がやや凹む平底である。肩部に6条の櫛描直線文、その下に連弧文を施す。体部外面は斜め方向のハケ調整、内面は、底部付近をハケ、上部はナデ調整を行う。

⑤は、底部と口縁端部を欠失する甕形土器である。推定口径13.6cm、最大胴径16.0cm、推定高15.8cmを測る。口縁部は内外面ナデ調整を行い、「受け口」状を呈すると思われるが、顎部には施文をもたない。頸部には櫛描列点文を密に配し、その下に直線文、さらに体部最大径付近に連弧文を施す。調整は、外面をハケ、内面は下半に横方向のハケ、上半部を斜め左上方向になで上げている。

出土遺物はいずれも全形を知りうるものではないが、器形、施文形態などは、近江地方の弥生時代後期に普遍的に見られるものである。編年の一つの指標となる口縁端部の形態を欠いているが、口縁部内外面のナデ調整など概して後出的な要素が見られることより、これらの土器をとりあえず、弥生時代後期でも後半期に属するものとしておきたい。

4．まとめ

現在までに滋賀県下では、五角形平面を有する竪穴式住居跡が6例程確認されており、他地域に比べて多いようである。高島郡安曇川町南市東遺跡④で1例、守山市伊勢町伊勢遺跡⑤で4例以上⑥、同じく守山市播磨田町播磨田東遺跡⑦で1例が報告されており、いずれも弥生時代後期に位置づけられている。（表1）

周辺地域においての類例は少なく、京都府田辺天神山遺跡⑧、六角形の例として、兵庫県播磨大中遺跡⑨のものなどが知られているに過ぎない。しかし、山陽・山陰地方では古墳時代前期の例として、岡山県雄町遺跡⑩、鳥取県青木遺跡⑪、同長瀬高浜遺跡⑫などで、五・六角形を呈する住居跡が検出されており、一つの分布の中心を成すようである。

近畿地方では、弥生時代後期に円形・方形住居が混在するとされるのに対して、近江地方は服部遺跡⑬などに顕著に見られるように、方形住居が主流を占めるようである⑭。堀ノ内遺跡の同時期に属する竪穴式住居に関しても、方形ないしは隅丸方形のものばかりである。いま当地域の弥生時代中期の住居形態については詳かではないが、多角形住居が円形住居の技術的側

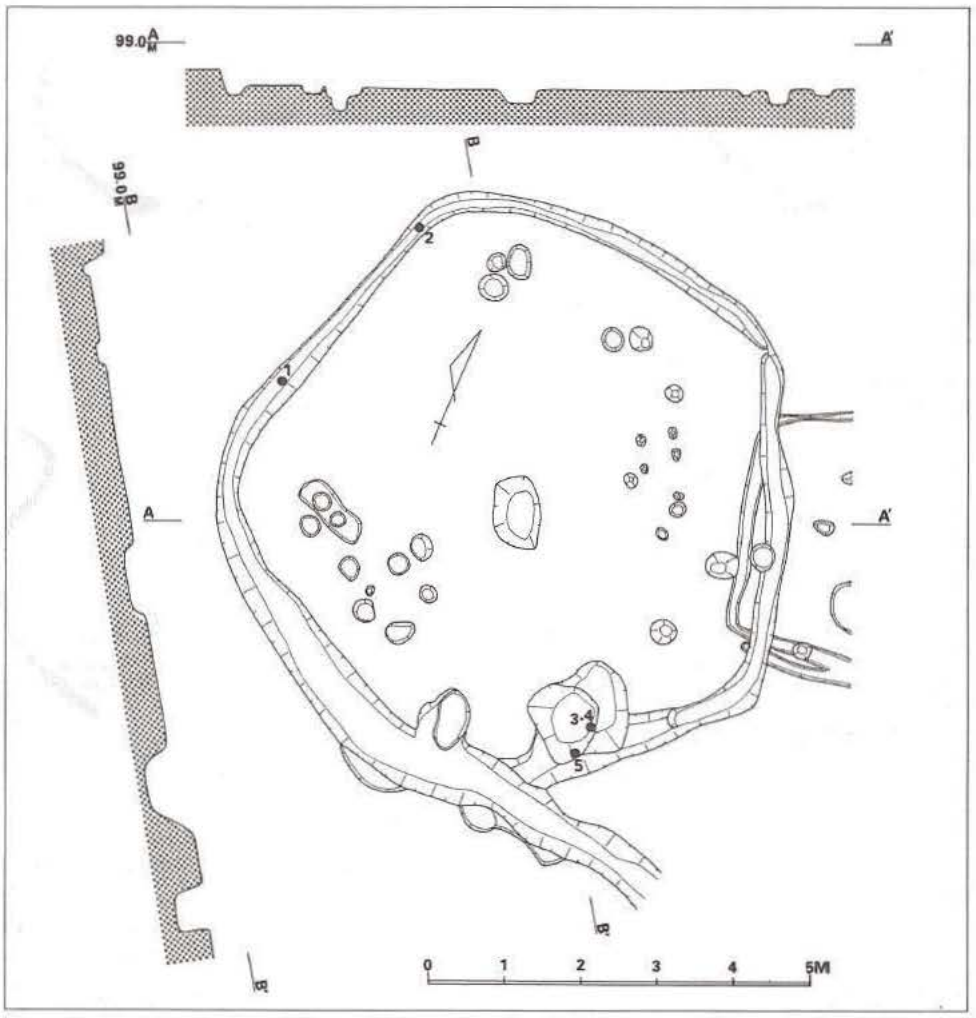

図3　住居跡実測図（番号は遺物の出土位置を示す）

面から抽出されるものであったとしても⑮、五角形住居跡の存在はいかにも特異な感がする。それでは、具体的に五角形住居が平面形以外に他の住居と隔絶した様相を呈するかと言えば、堀ノ内遺跡に関する限り、必ずしもそうではない。まず、その床面積であるが、滋賀県下の他例が大型傾向を示すのに対して⑯、堀ノ内遺跡の場合は約39㎡と小型であり、他の住居の平均値約30㎡と比べてそれほどの違いはない。さらに堀ノ内遺跡では、50㎡に近い方形住居も存在する。また、住居内構造や出土遺物の質・量についても際だった特殊性は示さないようである。しかし、その上屋構造の検討は措くとして、「平面形のちがいは室内利用法の差異ーひいては生活慣習の差異を表現するもの」⑰だとすれば、同時期の集落構成のなかで五角形住居が特殊な位置を占めていた可能性も依然として否定できないように思われるのである。

（田路正幸）

注①　柏倉亮吉「供養塚古墳」（『滋賀県史蹟調査報告』第6冊　1934）
岩崎直也「多種類の形象埴輪が出土　近江八幡市千僧供町千僧供古墳群」（『滋賀文化財だより』No.74　1983）
②　柏倉亮吉「曼陀羅堂址」（『滋賀県史蹟調査報告』第6冊　1934）
③　田路正幸「五角形住居跡を検出　近江八幡市千僧供町堀ノ内遺跡」（『滋賀文化財だより』No.86　1983）
④　安曇川町教育委員会『南市東遺跡発掘調査概報』（1979）
⑤　岩崎　茂・山田謙吾・山崎秀二「守山市伊勢遺跡の五角形住居2例」（『滋賀文化財だより』No.67　1982）
⑥　守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書』第12冊　1983）

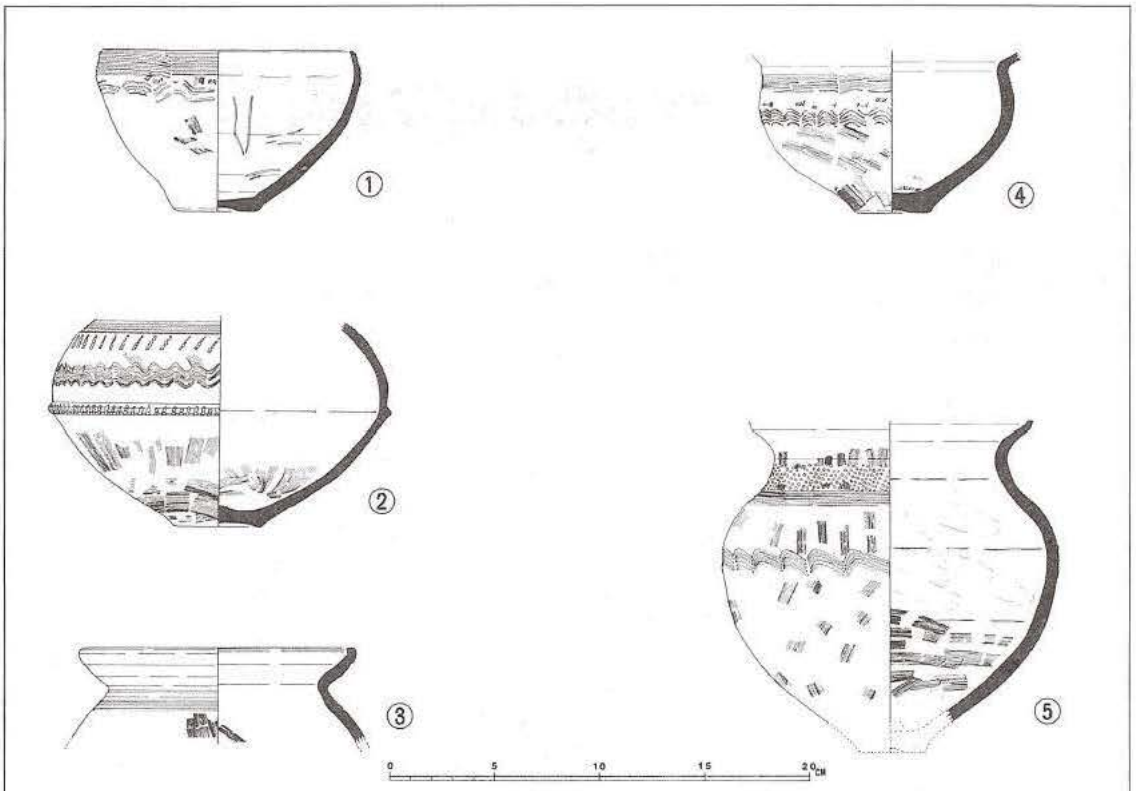

図4　出土遺物

⑦　同上

⑧　森　浩一編著『同志社田辺校地田辺天神山弥生遺跡』（1976）

⑨　播磨町教育委員会『播磨大中』（1964）

⑩　岡山県教育委員会「雄町遺跡」（『埋蔵文化財発掘調査報告　山陽新幹線に伴なう調査』（1972）

⑪　青木遺跡調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ　（1976～78）

⑫　（財）鳥取県教育文化財団「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」Ⅵ　（『鳥取県教育文化財団報告書』14 1983）

⑬　滋賀県教育委員会　守山市教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査概報』（1979）

⑭・⑰　石野博信「住居型の地域性」（森　浩一編『三世紀の考古学』中巻　学生社　1981）

⑮　石野博信「考古学から見た古代日本の住居」「大林太良編『日本古代文化の探究　家』　社会思想社　1975）

⑯　遺跡ごとの同時存在住居との比較が前提となるが、取りあえず50m²を超えるものを大型と考える。注⑮参照。

補注　守山市吉身西遺跡で新たに五角形住居が確認されている。『乙貞』18号と山崎秀二氏の御教示による。

	各辺の長さ	床面積	柱　穴	壁溝	炉	貯蔵穴	備　　考	注
南　市　東	5～6 m	約52m²	5本	——	中央	南辺中央	・弥生時代後期中葉	④
伊勢1地点	平均5.06 m	約50m²	5本	○	（中央）	（東壁面近く）	・弥生時代後期前半	⑤・⑥
伊勢2地点	6～7 m	約67m²	対応不明	○	中央	東南辺	・弥生時代後期（1地点とは時期差） ・北半は円弧状 ・壁溝は一部二重	⑤・⑥
堀　ノ　内	5 m	約39m²	（5本）	○	中央	東南辺	・弥生時代後期後半 ・上記例に比べやや小型	—

表1　滋賀県下検出の五角形住居跡の比較